

好奇心とは

何年か前のある中学校での話です。前庭に中学生の身長ほどの台座の上に立つ二宮金次郎の石像（薪を背負って本を読んでいる）がありました。昭和30年代までは日本全国の小中学校の校庭の一画にこの像がありました。勤労と勉学両立を象徴する像です。しかし、その後の中学校統合、校舎新築を機にほとんどの中学はこの像を設置しなくなりました。

さて、この中学校に一つの事件が起こりました。お昼の休憩時間になにげなく前庭に目をやった生徒指導の先生がたいへんなものを見てしまいました。何とこの歴史ある像の首から上が無いではないですか。朝の時点では確かに金次郎さんは元気に読書をしていました。

「生徒は何かを知っている」一生徒指導の先生は即座に全校生徒を体育館に集め、心当たりの生徒はぜひ申し出てほしいと訴えました。すると、一人の男子生徒がきまり悪そうに手を挙げました。先生は怒る気持ちを自己申告という生徒の誠意に免じて抑えながら校長室でわけを聞くことにしました。当時の校長先生と生徒の会話です。

生徒「すみません」

校長「どうしてあんな高いところへ登ったんや？」

生徒「あの人の読んでいる本をぼくも読みたいと思い、
どんな本を読んでいるのかと思って登ってみました。」

校長「ほう、それで。」

生徒「はい、本をのぞき込もうとしたら高くてバランス
をくずしそうになったので頭に手をかけたら首がとれてしまいました。
すみませんでした。」

校長「それで、その本には何が書いてあった？」

生徒「何も書いてありませんでした。」

校長「そうか。それは先生が悪かった。長い間外で読ませていたので文字が消えてしまっていたのか。首といっしょに文字も修理しよう。君が見てくれなかったら文字が消えていることに先生も気がつかなかった。ありがとう。君に怪我が無くてよかった。」

